



高橋浩一郎, 山下 洋 編
土屋 清, 中村和郎

衛星でみる日本の気象

岩波書店, 258×308mm, 158頁, 5,500円

目で見る気象学 (visible meteorology) という言葉が学会の中で強く言われ出して、もう十数年が過ぎた。その時はたしか室内実験などが活発になり、一種のシミュレーションがはやってきたから、この言葉が出たのだと思う。もちろん、そろそろ気象衛星も本格的実用化の途をたどりつつあった。しかし、今回のように堂々とした圧巻で、衛星で見る日本の気象が紹介されるとは驚いたものである。そして楽しく一枚一枚見させてもらった。素張らしい本が出来たものである。図版の大きさもちょうどよい格好で、いくら見てもあきない。その目次は次のようである。

宇宙から見た地球の雲

衛星画像を読む(簡単に画像の読み方を解説)

冬至, 夏至, 春分・秋分, 雲の形態, 'ひまわり' 画像と雲の解析図

そして各四季の特徴あるパターンを紹介している。(地上天気図その他参考の図を引用しながら解説)

1. 冬
季節風, 豪雪, 流氷と積雪, 低気圧など
2. 春
带状高気圧, 移動性高気圧, 低気圧家族, 黄砂, 黒潮と親潮
3. 梅雨
梅雨前線, 海霧, 集中豪雨, 梅雨の出入など
4. 夏
小笠原高気圧, 海風前線, 雷雲, チベット高気圧, 台風など
5. 秋雨期(台風期)
秋雨前線, 台風の生涯, 熱帯収束帯など
6. 秋
带状高気圧, 放射霧, 地形性雲, ジェット網雲, 時雨など
7. 世界の気象と気候
5つの静止気象衛星, 北半球・南半球の雲, アジアのモンスーン, 熱帯収束帯, 真冬の南半球熱帯の四季, 北半球・南半球の各季節など

8. 気象・海象の微細構造(ランドサット画像)
冬の季節風の雲, 波状雲, 積雪, 沿岸流, 桜島火山の噴煙, オホーツク海の流氷など

そして付録として

1. 地上から見た雲と'ひまわり'から見た雲
2. 日本の降水量分布図・主要地点の気温推移(365日)
3. 大気の大循環(松野太郎)
4. 静止気象衛星'ひまわり'のシステム

以上のものが掲載されている。とくに気候的なものはおもしろく拝見した。最近国際雲気候計画がWMOから提唱されている時代だけに、この平均的雲分布は今後も大切な情報となるだろう。

全般に図(写真)と説明が半々ずつ施してあり、肩こらず興味をそそる。

言うまでもないが、「見る」(ラテン語で *videō*) とは人間が1つの心眼をもって「見る」ことであり、これは「観察する」(*observō*) と関連する語で、ものの本質を考えつつ見たり観察したりすることと解しうる。それは、ただ「見える」と言った自動詞的なものとは異なるはずである。もちろん、雲画像からえられる情報にも当然限界があり、たとえば雲の内部構造の不明さ、陸上で定量的解析がしにくいことなどいろいろあるが、とくに(ひまわりによれば)海上で大規模に、しかも連続して観察できることは大変貴重な情報であり、陸上でも重要な雲パターン資料などを数多く提供してくれる。

よく衛星資料は、たとえばじょう乱予測について戦略的技術として用いられるという。それは広域においてじょう乱などのポテンシャル(可能性)を知らせてくれるという意味である。しかし、台風の監視などにはまさに戦術的技術としても欠かせない。そして最近では気候に革新的情報を提供している。

この本の素晴らしさは、一々こまかいことを言わない限り、なかなかスカッと言いにくい。もしこの本に強いて注文をつけるとすれば、雲画像と地上天気図や降水量分布図、レーダーエコー図など同じスケールで対応できればとも思うが、これについては熱心な読者が薄い紙に天気図等を記入して、写真上であてはめてみたらよい。

とにかく、高橋先生はじめ4人の編者の御労苦に大いに感謝したいと共に、今後読者の方々が続出して、その結果、雲の構造は何か、どのように変化するかなどと心眼を高め、自然の構造の奥深さをしっかりと観察されることを切に希望する。

(内田英治)